明二四十八願一」と述べられているごとく、四十八願を願名と経文とに亘って概説し、異訳そして他経を引き、又義寂等の釈義の四十八願を悉く引き、それに私釈を加えて、一つの四十八願釈を構成していることにみられるように、

又、慈慧大僧正伝に、臨終相として、

和尚合掌西面誓曰。我所レ修善根悉資二菩提一。兼分二薫修一。廻二向一一切衆生一。命終之終願必往二生極楽世界一矣。口念二弥陀一。心観二実相一。機縁云尽。遂以入滅 (2)

と、あるごとく、西方願生に存し、その行実に於て、天台教学の実践は弥陀念仏に存し、それは観念念仏に走ったのである。これ密教と密着していたこれまでの天台が、本来の観念中心に立ち戻り、天台円宗の成仏法の完成の第一歩を踏みだしたのが良源であり、又密教の立場について、

「草木発心修行成仏記」に、

又云、真言勝、天台劣云云。努不レ可レ爾也。常同別故。真言天台或一或二也。伝教、慈覚両大師乃至古徳釈中其義明鏡也。豈有二円家真人一可レ不レ信レ之耶 (3)

と、あるごとく、従来の顕劣密勝の態度から、伝教に復古せんとする努力があったのであり、こゝには、本覚思想の発芽、天台円教の立場がみられ、密教偏重はなかったのである。

これらの思想の発展は慧心によって継がれており、聖人が四条金吾殿御返事に述べられたごとく、慧心は良源より観を学ぶとし、良源の教学は、慧心によって大成されたとみていたようであり、慧心を持ってその中に良源を含み破折していると考えるのである。

註

(1) 叡山天海蔵（叡山文庫）所収　頁三九
(2) 群第五輯巻六九、頁五六〇
(3) 仏全二四、頁三四六

持経者道命をめぐつて

——読経・歌詠み・サロン——

鈴木治美

道命を持経者と規定した記録は『大日本国法華経験記』

第八六・天王寺別当道命阿闍梨条が嚆矢と言え、以後僧伝をも含む大半の伝記等ではその持経者としての特性―法華読誦の美声・霊験―が標榜されている。但しここでは道命の他の側面―歌人・いろ好み―に着目したい。以下道命の事歴を五期に分類した。この各期は道命をめぐる各コネクショングループの興亡と共に切り換えられる。

㈠ 天延二（九七四）誕生～永祚二（九九〇）十七才。道命は藤原道綱（兼家二男）の第一男。道命の歌才は道綱母（蜻蛉日記作者）を継いだものであろう。①道命誕生前後その周辺は祖父兼家（九七八任右大臣）と良源（九六六座主宣命）乃至尋禅（兼家弟）の関係に集約される。この期間は良源晩年の大活躍期で外護者兼家による横川興隆[1]は顕著。又良源の任大僧正（九八一）には女詮子を円融帝女御としていた兼家の後楯が考えられる。②さて道命の名は尋禅の上表による永祚二年二月十四日の太政官牒「応下以二妙音院一為二御願一補二院司供僧一併中置年分度者上事……（十禅師）伝灯大法師位道命年十七腐三」に始めて現われる（妙音院は横川楞厳院別所）。この「腐三」を得度以後三年とするなら道命の出家は永延二年（十五才）に当り座主は既に尋禅（在職九八五～九）。但し道命を「慈恵大僧正弟子也」とする諸伝記に従うなら良源入滅（九八五、道命十二才）以前となろう。兼家が一条帝（母后は詮子）摂政となった寛和二年（道命十三才）には横川恵心院は官寺に昇格し年分度者を置かれている。兼家の横川への肩入れから考えて道命は良源直系の尋禅の許で横川系の度僧として出発したであろう。しかしながらこの官牒と同月十七日に尋禅は入滅。同年五月八日に兼家は出家し道隆（兼家一男）が関白となる。十月五日、定子（道隆女）は一条帝中宮となった。

㈡ 正暦二（九九一）十八才～長保二（一〇〇〇）二七才。相当する第二コネグループは摂関道隆と一条帝中宮定子を中核とする。花山帝退位（在位三年）と一条帝即位（寛和二、七才）は兼家一門によって推進されたとも見得る。[2]道隆の同胞子息の昇進ぶりは目ざましく道綱も正暦二年には参議。①この同年道命（十八才）の内裏八講（御伽草子「和泉式部」）を裏づける一次資料はないが一門の栄

達から見てあり得たことかも知れない。②定子サロンへの出入り。『枕草子』三〇七段ほかは中宮定子の女房清少納言の見た道命の酒脱な人柄と後宮サロンに於ける読経（法華）と和歌との混交した受容態度を伝える。③山林修行（叡山、熊野乃至書写山）[3][4]と法輪寺籠住は今期から第三期に亘ると思われる。就中法輪寺での霊威―住吉、松尾、熊野権現等の聞経讃歎等―は持経者道命を構成するポイントであった。[5]即ち道命は山林乃至霊験処での修行を以て美声の経読みとしてサロンに立ち返り、そこで更に歌人としてのキャリアを加えて行った―相互連関による増幅性―と言える。かかる道命の在り方は叡山を本寺としながら主要行動範囲をそこに置かない点でも持経者の一類型である。[6]さて道隆没（九九五）後、中関白家の失墜と道兼（兼家三男）の急死により道長（兼家四男）が関白となる（九九六）。その女彰子が中宮となった長保二年、皇后定子の崩により今期は終る。

㈢　長保三（一〇〇一）二八才～寛弘八（一〇一一）三八才。第三グループ＝関白道長とその室倫子、一条帝中宮彰子。道長と道綱は正室の血縁関係（道綱室は倫子の妹）によって二重に結ばれ、これが道命を第三グループへ移行せしめた一要因であったろう。①寛弘元年十二月、三十一才で道命は阿闍梨となった。同五年には彰子にのちの後一条帝誕生。②好色道命と姪女和泉式部との関わりを伝えられる可能性は、式部が彰子サロンに出仕した寛弘六年頃以降に胚胎する。この系統の説話はいずれも中世以後の成立で（『古事談』が初見）、僧伝にはなく又そのアレンヂの仕方に道命像庶民化の過程がうかがえる。③倫子の女房赤染衛門との関係（後拾遺集第三）。これら女流歌人（道命と同じく中古三十六歌仙の成員）との交情は平安女流文学サロンともいうべき後宮サロンの一性質に由因しよう。

㈣　寛弘九（一〇一二）三九才～寛仁四（一〇二〇）四七才。一条帝崩御により第三期は終ったが新帝三条（母后は兼家女超子）と中宮妍子（道長二女）は道命の今期のコネとなった（大納言道綱任中宮大夫）。①長和五年正月十八日、四天王寺別当（第廿七代）就任（四三才）。但し翌日には三条帝は譲位し翌年五月九日崩御。②三条院追慕と皇

太后妍子（皇太后大夫は道綱）の御所への出入り。『栄花物語』巻十三～四に記される道命の三条院への挽歌は道命自身の世間的失脚への予兆とも見えよう。道命とサロンとの関わりは妍子で止まり後一条中宮威子（道長三女）には繋がらなかったと見得る。③但し寛仁元年の後一条帝「賀茂行幸御祈禱十社御読経事」に道命は住吉社分を勤めた（小右記）。さて同三年三月道長は出家し十月に頼通（道長一男）が関白となった。④翌四年三月、入道大相国（道長）の無量寿院供養には堂達として教円と共に斉会。これが道長傘下の道綱が道命に与えた最後の後楯と言え、道綱は同年十月十六日病没。⑤従って天王寺別当退任（同年十二月）は父道綱の死と関係づけられよう。

㈣　寛仁五（一〇二一）四八才～没年（長久二年・六八才以前）。『法華験記』以下の伝記に見る道命の生前の行状は前期迄に相当する。直接コネクションの解体による権力圏外で道命は籠居し落魄の晩年を送ったと思われる（千載集巻九等）。但し『法華験記』道命条末尾(7)（この記述は以下の僧伝に依用され道命の死後を往生人として飾っている）からその周辺に厭世・浄土欣求を基調に置く恐らくは文人グループの介在を予想できよう。これは又、道命の没年を『法華験記』成立の最下限たる長久五年（同序、八七条）を遡る三年（長久二年）以前とする基本的手掛りである。

☆　以上の如き道命の周辺から「後宮サロンを背景とし経読み乃至歌詠みを混交した平安期持経者の一典型」の設定が可能であろう。

註

(1) 特に永観二年十月の横川薬師堂建立供養、同十一月の恵心院供養（日本紀略後篇）

(2) 「（花山）天皇生年十九…向二花山寺一落飾入道。蔵人左少弁藤原道兼。僧敞久。二人随従。出二縫殿陣一。参二元慶寺一。即時令下左近少将藤原道綱持二神璽宝剣一。献二東宮（一条）御在所凝華舎上。件三人外他人不二敢知一之。禁省事秘故也。即夜。右大臣藤原兼家参二入内裡一。令レ固二禁門一」（扶桑略記・寛和二年六月廿二日条）

(3) 『詞華和歌集』巻三『千載集』巻七など

(4) 『今昔物語集』巻十二・第三六

(5)(6) 拙稿『大日本国法華経験記』に見る持経者像（大崎学報一二二号所収）

(7) 「乃至一期運尽。遷二化他界一。委有二得意知音人一。憶二存生契一。常作二是念一。道命阿闍梨不レ審二生所一。依二妙法力一。得レ生二浄土一歟。若知二我心一可レ有二夢告一。両三年間。常念二此事一。時此人夢……」